

草津市立矢倉小学校通信 令和2年1月21日 NO.16



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

とがめず、追い立てず

九九の習得に励んでいる子がいる。一つひとつの段を、九九の表を見ながら、順序よく唱えて答えだけを繰り返し書くという作業をする。最初は一つの段に、2分くらいかかっていたのが、2回目、3回目となるにつれてどんどん速くなる。時間を計る私が思わず、「おお！すごい！！」と喜び、うれしがるものだから、その雰囲気心地よいのか、「もう一回、もう一回。」とタイムを縮めようとチャレンジしてくる。だいたい30秒で唱えられるようになったときには、ほとんど覚えているようになっている。そこで今度は、九九の表の答えのところだけを指で隠して、言わせてみると自然と言えてしまうから、本人も驚き喜ぶ。少し言い間違えたところについては、「自分で自分にテストするつもりで・・・。」と九九の表を使って確かめさせ、「それでは、はじめから言えるかなあ。」と促すと、俄然やる気を出してくるからほほえましい。

こうした場面で心がけていることは、その子がしていることを見守り、できてきたことを常にほめるようにし、一緒に喜ぶことだ。決して相手をけなさないということとも言える。しくじっても「だいじょうぶ。」「だれだって、初めのうちはこういうもんだよ。」とおおらかに構え、一生懸命がんばることをいっしょに楽しむようにすることだ。

こうした姿勢は、実はこの歳になってやっと自然とできるようになったことであり、若い頃の苦い経験がもとになっている。

若い頃は、とにかく細々と指図してさせるばかりだった。こちらの言ったとおりにしていないと、「どうしてできないのか、やる気はあるのか、みんなはできているのに・・・。」と、レールから外れることや失敗してしまうことを許さず、追い立て、とがめてばかりだった。あれこれと指図をすればするだけ、その指図を受ける子は「これでよかったのかな・・・どうだったかな・・・。」さらには、「また何か言われたらどうしよう・・・。」などと、こちらの視線を気にするようになり、それまであたりまえのようにできていたことさえ自信が持たなくなっていった。

ふと隣の学級のようにすをみると、いつも笑顔が絶えず、なごやかな雰囲気である。何か問題が起きても、誰かがしくじっても、である。確かに、初めのうちはこちらの子どもたちがしっかりしているように見えていたが、やがて、着実に力を付けていることに焦りを感じた。そんな私のようすを見て、その学級を担任する先輩はこんなことを教えてくださった。

子どもは、いつもほめられたい、認めてもらいたいと精一杯のことをする。しかも、自分を大切に思ってくれる身近な大人の期待に応えようとするもの。誰だって、はじめから何でもできたわけじゃない。ぎこちないところから、少しずつできるようになっていくものだ。そんな育ちをいっしょに味わうようにしていけば、子どもも大人もお互い幸せになれるのでは・・・。

以来、私は、とがめず、追い立てず・・・を心がけるようになった。 校長 大林 道範